天理スポーツ シンポジウム⑤

おやさと研究所
天理スポーツ・オリンピック研究室
難波　真理　*Mari Namba*

３月 12 日に行われた「天理スポーツシンポジウム 2011　未来を創る！　～天理　障害者スポーツ」の報告第５回目は、視覚障害の柔道選手としてこれまでにパラリンピック４大会連続でメダルを獲得し、日本の視覚障害者柔道を牽引している藤本聰氏に、競技者の立場からお話を頂いた内容である。

藤本聰氏の講演

私は現在 35 歳で、生まれた時から先天性の視神経異常という病気があり、視神経に何らかの異常があって、幼い頃から弱視だった。今も視力は 0.1 で矯正もほとんど不可能な状態。左は視力が０で、皆さんの顔がぼやけて見える程度である。そのような中で、近所に柔道場があり、習い事を始めるような感じで柔道を始めた。それが５歳の時なので柔道歴は 30 年、視覚障害者としては 35 年ということで大ベテランである。そのなかで私が柔道を通していろいろ経験してきて、これから柔道を変えていかなければならないと思うこと、これまでにパラリンピック４大会連続でメダルを獲得したということもあって視覚障害者の柔道を今後、私が引っ張っていかなければならないという使命感があり、今日はそういうところも含めてお話をさせていただけたらと思う。

アトランタ大会から４大会連続パラリンピックに参加するにつれ、世界の選手の取り組み方などの姿勢などがすごく違うなと感じてきた。それはメダルの数に現れている。北京では私の銀メダル１つだけだった。そう考えると、ロンドンではゼロになってしまう。これは選手も含め危惧をしている。昔はソウル大会など、ほんとに素人の人たちが世界大会に出るような状況だったからこのような結果が残せてきたと思う。やはり海外の、特に社会主義の国などはすごく力を入れていて、日本やアメリカなどは仕事をしながらの厳しい状況なのでメダル獲得は難しいと、海外と交流する中で話している。

メダルが減少した原因はいろいろあるが、各国の組織体制などが確立しつつあるということがあると思う。特に海外では最近、柔道のコーチがいい選手を一人ひっぱってきて、それを徹底的に強化するという傾向が強いようだ。それぐらい個人に特化して徹底的に強化している。その中でオリンピックのコーチがついているなど、どこから見ても万全というような状態である。何気ない練習であっても、アップする道場でカメラが回っていたりとかしていて、それを日本のコーチ陣から聞いて、打ち込みの時に変な打ち込みをしてみたりしたが、すでに撮られている。そのぐらいの組織力で出るということで、やはり日本とはぜんぜん違うなと思った。

我々はアマチュアだが、アマチュア根性でプロの選手に負けるか！　という感じであるが、満足とは言えない資金力ではやはり限界がある。オリンピックの予算は文部科学省がスポーツということで年間 25 億円だしているが、パラリンピックに関しては年間１～２億円。これはパラリンピックが厚生労働省の管轄で、我々がやっているスポーツは社会の福祉、要するにリハビリテーションの延長であるということである。我々は、私がやっているのは命がけで、すべてを犠牲にしてというぐらいの覚悟でやっているし、もう少し現場の声を聞いてもらえたらと思う。スポンサーや放映権等の問題も含め、スポーツ省を作る計画に我々はほんとに期待をしていたが、ほんとに残念である。

これからロンドンに向けてメダルの数を増やすにはどうしたらいいか。いろいろ考えながら改善をしていかなければならないと思っている。せっかくお金を使って合宿をしているのだから、効果のある、実りのあるものをしなければならないという意識改革をしなければならない。北京の時に、他国と組織力が大きく違うということで、選手の私から理事の先生方に訴えかけた。先生方も仕事を抱えながらやっていただいていたが、少し意識改革があって、我々のためのバックアップ体制がよくなったと思う。ただそれでも、現実は厳しい状況である、

スタッフは基本、ボランティアですから、お金と時間をかけて、交通費を払って、休日を返上でしてくださっている。なかなかやはり厳しいというか、我々もやっていることに温度差があったりする場合に、ボランティアで来てくださっているので、こうしてほしいということが言いにくいのが現状である。しかしそういうことを変えていかなければならず、現在新しい監督の下、改革を続けている。

最近は全日本柔道連盟（全柔連）のほうでずいぶんバックアップしてくださるようになった。全柔連の先生方に、我々の活動を見ていただけているということで、学生の選手たちも海外の大会や合宿に出やすい状況になった。

現状としては、結局、選手が地元でどれだけいろんな所に出かけて練習できるかというだけなので、合宿の回数や、指導者に我々がどういうアドバイスをしていただけるのかといった問題がある。結局、視覚障害者の柔道は、視覚障害者しかわからない。柔道はシンプルに柔道だけど、視覚障害者特有の、特に全盲の方はひとつの技を覚えるのに時間がかかる。実際問題、言葉の使い方であったり、立ち方であったり、道着の持ち方であったり、やはり細かな指導が出来る人が絶対に必要で、スタッフとか、専門性を持った人は特に必要である。残念ながら今は選手間で教えあっている状態である。

私が出来ることというのは、実績も含めてみんなを引っ張っていかなければならないということで、まずは組織を変えようと、自分から立ち上がってみたり、いろんなことをやってみたり、働きかけてみたりと、試行錯誤している。しかし個人でできるレベルというのは、もはや超えている。やはりいろんな、自分でできないところを変えていかなければ次はないので、そのくらいの焦りを持って次のロンドンには挑まなければならないと思っている。そういう意味でこういう講演活動をやらせてもらっている。（続く）